

壺斗俵

いとひょう

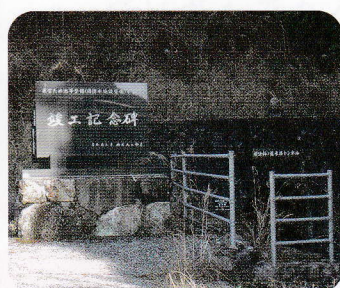


壺斗俵といえは沈下橋である。この橋が架けられたのは昭和10年で、現存する沈下橋では最古のものとして、国の有形文化財に指定されている。この橋の北側一帯に広がる集落が壺斗俵地区である。壺斗俵には、現在、50世帯、86人が暮らしている。

さて、壺斗俵という地名の由来は応安年間にさかのぼる。応安年間(1368〜1374年)は南北朝時代で、室町幕府の將軍は足利義満であった。応安3年3月に、遠く奥州南部の地から来た周防守高忠という人が田畑を開墾して、穀類壺斗を、当時のこの地の支配者に献上したことから、この地域を壺斗俵と呼ぶようになったという記録がある。また、江戸期に編纂された書物によれば、この壺斗俵村の近隣に南部村という記載がある。この南部村も、高忠が開墾した地域で、彼の出身地をとって名付けたとみえる。高忠の一族はその後、南部氏を名乗り、徐々に力をつけていく。1419年には津野氏とともに、大野見氏を破り、この地で一定の勢力を形成することになる。

農業用水路に流してきて使っていた。大水が出るたびに補修をしながら使ってきた水路であったが、明治23年9月の大洪水によって、とうとう壊滅的な被害を受ける。大規模な修復を行ったが、またもや洪水によって決壊。この事態に、野村成満は法師ノ越山に水路のトンネルを掘るしか解決策は無いと考え、農民たちにその必要性を説いてまわり、工事にかかる費用を集めた。そして自らが測量を行い大工事にあたった。ところが、強固な岩盤に阻まれ、費用はすぐに底をついた。これ以上農民に負担をかけさせたくない成満は、自らの私財をすべて投げ打って費用を工面。それだけでは足りず、弟にも私財を供出させ、とうとう10年の歳月をかけて掘抜いたのであった。以降、市生原、壺斗俵には、途切れること無く、農業用水が潤うこととなった。

近年になって老朽化によるトンネル内の崩落があり、平成13年から3年をかけて補修。トンネル出口には、成満の献身的な偉業を讃える碑が建てられている。



成満の意志は平成の修復を経て
100年を超えた

町のうごき

(11月30日)	人口	前月比	出生	死亡	転入	転出
男	8,277	-12	男 4	11	13	18
女	9,245	-10	女 3	12	10	11
計	17,522	-22	計 7	23	23	29
世帯数	8,575	-11	(11月中の届出)			
窪川地域	12,318人		大正地域	2,488人	十和地域	2,716人

四万十川の 水質状況

適正值(mg/l)	12月14日
リン酸	≤ 1.0 測定範囲以下
硝酸	≤ 0.5 0.199
アンモニウム	≤ 5.0 測定範囲以下
アニオン活性剤	≤ 1.0 0.15
化学的酸素要求量	≤ 10.0 2.101

調査：大正（吾川）
資料：四万十高校自然環境部